

AFTERNOON TEA

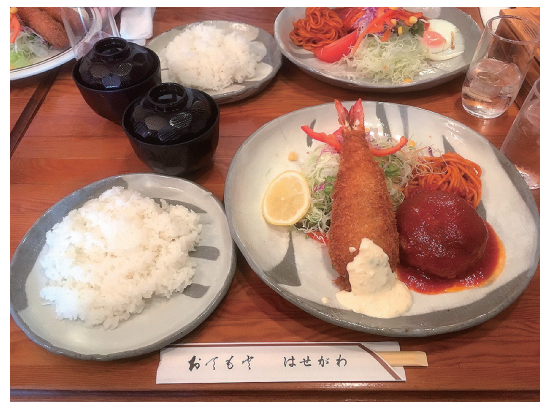
食と生理学，多くの方に支えられて京都で研究をしています

京都府立大学大学院生命環境科学研究科動物機能学
研究室

岩崎 有作

京都府立大学動物機能学研究室の岩崎有作と申します。鹿児島大学の加治屋勝子先生よりバトンを受けました。私は、学部から博士課程まで学生時代、静岡県立大学食品栄養科学部（生活健康科学研究科）で学びました。そして、加治屋先生は大学院の先輩で、大変お世話になっております。コロナ感染症による自粛生活で多くの方と疎遠になってしまった中、本原稿のバトン、自粛環境の緩和、鹿児島への出張が重なり、加治屋先生とは先日久しぶりに食事ができ、とても楽しい時間を過ごしました。その際に「食と健康」「予防医学」「食と生理学」といったキーワードが話題となりました。博士（食品栄養科学）の学位を有する私たちは、食の有する有益な機能を明らかにしたいという想いをもって学位取得に切磋琢磨してきました。あれから約15年が経ち環境は変わりましたが、私たちは生理学会に所属し、食に対する情熱を持ちながら新たな「食と生理学」分野の研究に真摯に取り組んでいることが先日の会話で確認でき、とてもうれしく心強く感じました。

私は学生時代、渡辺達夫教授の下、トウガラシの辛味成分カプサイシンのTRPV1と感覚神経を介した代謝亢進作用について研究をしてきました。当時、TRPV1以外にTRPA1やTRPM8がクロニングされ、これら受容体に作用する食品成分も次々と明らかになり、香辛料やハーブの機能性を理解するための様々な仮説を立て日々ワクワクしながら研究を進めていたことを思い出します。そして、TRPチャネル研究を進める中で、生理学研究所の富永真琴教授と共同研究する機会を与えて頂き、博士課程時代は富永研で研究をさせて頂きました。現在でも富永先生をはじめとする



京都府立大学近くのグリルはせがわのAミックス

富永研の先生方には大変お世話になっております。

TRPV1等が発現する内臓感覚神経に興味を持ち、博士課程修了後は求心性迷走神経を介した脳・末梢臓器連関研究をされておりました自治医科大学統合生理学部門の矢田俊彦教授の下で2008年よりポスドクをさせて頂けることとなりました。矢田先生の下では10年間、生理学・内分泌学・代謝学の基礎を学ばせて頂き、そして、新しい研究へチャレンジする機会も頂き研究を発展させることができました。矢田研と生理学研究所の箕越靖彦教授の研究室とで共同研究や研究会を運営していることもあり、箕越先生と箕越研の先生方には現在でも大変お世話になっております。私は研究での留学経験が無いのですが、多くの国際学会で発表の機会を頂き、海外研究者との研究交流もさせて頂きました。

2018年4月からは、現職の京都府立大学にて研

究する機会を得ました。これまでは偉大なる先生の下で研究を進めてきましたが、身一つで京都へ異動し、研究を始めることになりました。京都府立大学の多くの先生方には大変お世話になっております。京都府立大学には文学部和食文化学科があります。佐藤洋一郎教授（現在はふじのくに地球環境史ミュージアム館長）と増村威宏教授とは、和食における米や餅について議論する機会を頂き、和食や京料理への貢献を目指した新しい「食と生理学」の研究を開始しました。これまでの研究活動でお世話になった先生方にも多くのご支援を頂いております。自律神経生理研究会への参加をきっかけに、私の自治医大時代から親しくさせて頂いている谷田守先生（金沢医科大学）と安倍

力先生（岐阜大学）とは現在でも緊密な関係を保ちながら、「自律神経」を共通項に共同研究を行っており、同世代の先生方との楽しい研究活動を実施しています。

現在、文化と歴史ある京都で「食と生理学」研究ができていることは、本原稿では書き切れない程の多くの先生方、そして、研究室所属の学生さんのご理解と支えのおかげです。感謝申し上げます。

追伸：京都に住んでみて分かったこととして、京都には懐かしくて美味しい洋食屋さんがたくさんあります。学会の際の食事として、京懐石・割烹以外に、洋食もおすすめです。



After コロナ, After 北海道

名古屋市立大学大学院医学研究科薬理学分野

山口 陽平

名古屋市立大学大学院医学研究科薬理学分野の山口陽平と申します。東京慈恵会医科大学細胞生理学講座の墓地本宙己先生からバトンを頂きました。墓地本先生は、私が卒業した旭川医科大学の先輩で、大学生の頃から交流があります。基礎医学分野では数少ない母校の先輩ということもあり、研究に関することだけでなく、キャリアも含めて機会があれば相談に乗って頂き、いつも感謝しております。

私は、2010年に北海道の旭川医科大学を卒業しました。名古屋での初期研修後に岡山大学大学院に入学し、大学在学中より希望していた基礎医学研究の道に進みました。大学院修了後は、ドイツ留学を経て、母校の生理学講座に着任しました。そして、2022年10月に現在の所属先である名古屋市立大学へ異動しました。新しい環境で半年程が経ち、引越しの疲れも取れた頃に、本稿を書いています。

旭川在住の4年間は、その大半がコロナ禍でし

た。すでに遠い昔のように感じますが、北海道では緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が幾度となく出されたため、道外への移動がかなり厳しく制限されていました。道外で開催された学会への参加は全てオンラインだったので、名古屋への引越しは久しぶりに海を渡るという感覚でした。実際、北海道の旭川から名古屋への引越しは、距離にして1600 km、荷物の輸送に鉄道を使うため5日程かかり、車の移動にはフェリーを利用する必要があります。陸路で繋がっている本州内での引越しとは全く異なるため、海外引越と言っても過言ではありません。この海外へ渡るような感覚をさらに強くしたのは、大学の周辺環境の違いです。以前は、研究室から外を眺めると、「北海道の屋根」と称される大雪山を背景にした雄大な自然が広がっていました。一方、現在の研究室から外を見渡すと、エヴァンゲリオンのネルフ基地のような名古屋市立大学病院がそびえ立ち、周囲にはビル群が広がっています。引越した直後は、名古屋に



大雪山と名古屋市大病院

住むのは二度目にも関わらず、SFの世界に飛び込んだような感覚になりました。今では、そのような感覚はほとんどなくなり、落ち着いてきました。人間の慣れというものは、不思議なものです。

このように研究場所は変わりましたが、大学生の頃から興味を抱いているメカニカルストレスが生命現象に与える影響を解明するメカノバイオロジー研究に、幸い継続して取り組むことができます。名古屋市大の薬理学分野に所属させていただき、このような幸運な環境で研究できることに、心から感謝しております。現在は、メカニカルス

トレスの一つである静水圧に注目して、その心臓への影響の解明を目指しています。その目標を達成するため、数年前から共同研究として進めているデバイス開発は、佳境を迎えつつあります。また、名古屋はアクセスが比較的容易な場所にあり、アフターコロナになりつつある現在では、対面での打ち合わせや共同実験が容易にできるようになってきました。今回の異動をきっかけに研究をさらに加速させ、名古屋から心臓に対する圧力研究の知見を発信できる近い未来を思い描いて、心躍らせています。